

(大島郡笠利町用見崎)

位置と環境

用見崎遺跡は笠利半島の最北端に位置する。大島本島最北端の遺跡でもある。用見崎の海上は黒潮の合流地点でもあり、常に海流が動いている状態である。このため魚貝類も豊富であるが、海流も強く危険も隣り合わせている。

遺跡は標高100mを越える高崎山の急傾斜地の麓にあり、標高約10mの砂丘基部に位置する。砂丘は約100mで海岸線に続く短い距離にある。ただし、南北に延びる砂丘は約1kmにおよび、その中に用長浜遺跡も立地する。砂丘は山手側の古砂丘と現砂丘後方の砂丘、そして現砂丘の3段階から砂丘形成がされている。古砂丘と砂丘の間には南西側山手から北側に小川が流れ、砂丘が分断されていた。以前は海から小舟が後方(南西)湿地帯まで入れる状態であったという。現在は配水管が埋設されている。

調査の経緯

用見崎遺跡は、1971年に白木原和美が「大島郡笠利町の先史的所見」として南日本文化4号に「用見崎遺跡」として紹介されている。その後、約1キロにおよぶ砂丘は字名も違うことから1994年の発掘調査から字名をとって「用見崎遺跡」とした。

調査は地主である企業が大規模開発に伴う発掘調査を行う。調査の結果、遺跡部分を保存し、活用を行う計画で事業はスタートした。笠利町教育委員が1994年に調査を行う。その後、奄美における砂丘遺跡と兼久式土器研究の立場からこれまでも笠利町において発掘調査を行って来た熊本大学考古学研究室が1995年から1997年まで3年間調査を行った。

その間、貝類依存体についての調査が4年間において行われたほか、脊椎動物遺体について2年間行い、フローテーション調査や地理・自然・環境などについて各専門家がそれぞれの立場から調査に参加された。

遺構と遺物

1994年の調査で住居跡2軒と兼久式土器、貝札、オオツタノハ製貝輪、貝製品などが出土した。兼久



第1図 用見崎遺跡の位置

式土器については、古いタイプでマツノト遺跡第1文化層下層と白砂層から出土する土器と類似する。1995年の調査では更に開元通宝の出土もあり、用見崎遺跡の時期を7世紀前後とする時代設定の資料提供になった。これまでの調査でマツノト遺跡出土の比較などから用見崎遺跡出土の兼久式土器は6世紀から8世紀と位置づけられたことは大きな成果である。

特徴

小規模遺跡ではあるが4年間にわたり、綿密な調査がおこなわれた。ヤコウガイの大量出土。兼久式土器の位置づけなどその成果は大きい。

資料の所在

出土遺物は、第1次調査分が笠利町歴史民俗資料館に、第2・3・4次調査分は熊本大学考古学研究室に保管されている。

参考文献

笠利町教育委員会1995「用見崎遺跡」『笠利町埋蔵文化財発掘調査報告書』20

熊本大学考古学研究室研究報告31, 32, 33

1995年, 1996年, 1997年

(中山清美)

